

第58回神奈川建築コンクール 住宅部門審査総評 審査委員 内田 青蔵

本年度の住宅部門応募は、個人住宅作、共同住宅作、合計57作であった。各審査委員の投票による書類審査のうえ、16作を現地審査対象とし、同審査の結果、個人住宅6、共同住宅3作を選出した。

表彰作品は、書類審査後の一次選考、現地審査後の二次選考を経て選出された。両選考とも、各審査員の投票とその結果をもとにした合議による。二次選考では、恒例のように書類選考では分からなかった周辺環境との関係をどう捉えているのかなどを中心に議論を行った。特に、写真や図面をもとにした一次審査で優れた作品であると高い評価を得た作品でも現地審査を行うと、周囲との関係を遮断するような閉鎖性が感じられたり、また、建てられた周辺環境との関係性が全く意識されていないことなどが明らかになり、二次審査の議題となった。最終的には、住宅を如何に周辺環境との関係性を捉えているのか、また、住宅を如何に周辺に開こうとしているのか、といった観点を重視することを共通認識として審査を行うこととした。

いずれにせよ、今回の表彰作品を改めて概観すれば、その立地状況に共通性が見られたように思う。すなわち、開発された住宅地でいえば、分譲後に取り残されたがけ地や整地の際に取り残された狭隘な変形敷地といったように、いわゆる商品化住宅ではなかなか対応しきれない敷地に建築家が様々なアイデアをもとにデザインした作品が多かった。こうした敷地を生かした作品は、建築家の腕の見せ所といえるかもしれないが、一方、そうした住宅だけが注目される傾向は、建築家にとって幸せな状況かどうかは、少し考える必要があるようにも感じた。

以下、表彰作品を簡単に紹介したい。

「360°」は、住宅地としては難しい崖地の端に建つ。こうした立地は、工夫によっては素晴らしい風景を室内に取り入れることができる。この住宅は、1階の床レベルを900mm掘り下げて半地下とすることにより、視界として広い空と遠くに広がる素晴らしい風景を獲得していた。また、この半地下は、安定した地中熱を利用する意図も兼ねており、設計主旨にある「古民家のように機械に頼らずに快適な住まい」を目指したものであった。南側デッキの軒も深くして日射をコントロールし、また、1階屋根は断熱効果を求めて芝生とするなど、建物全体に亘って緻密な計画が展開されている。

また、1階屋根の芝生は、周囲の環境との連続性が感じられ、周辺と溶け込んだ雰囲気を生み出している。しかも2階は高さを抑えた小屋風のデザインで、芝生に立つとまるで、芝生の中の小屋のようにも見えるなど素朴で親しみのあるデザインが展開されている。平面計画も、断面計画を駆使し、立体的に空間を連結させることにより狭さを感じさせない内部空間が出現していた。親しみの感じられるデザインを支える緻密な計画性に建築家としての力量が感じられ、最優秀にふさわしいものとして評価された。

「深底の家」も評価の高かった作品である。大きな母屋では住み難いと、老夫婦の最後の終

の棲家として計画されたコンパクトな小住宅である。立地の最大の魅力は、母屋の前に広がる桜の大木を中心に広がる緑深い庭であり、それゆえ、この既存の庭と一体化した住まいが追及された。1階のLDKの庭側は木サッシで全面が開かれ、ウッドデッキと水平に広がる深い庇に挟まれた風景は、住人はもとより訪れた人々を癒してくれる。この深い庇は、建物正面まで巡り、シンプルな外観を印象強いものとしている。この深い軒を支えるために、構造的には合成梁のトラスと天井と屋根面は合板で固められている。こうした構造も、室内に素直に表現されるなど、その実直でシンプルな表現が高く評価された。

「Casa さかのうえ」は、坂道に沿った斜面の敷地の形状をそのまま生かしながら、住居と小さなギャラリー及び貸室からなる建築を持ち上げ、そのピロティ部分をデッキとし、坂道を行き交う人々の「縁側」として開いている。とかく閉鎖的な住まいの提案の中であって、建物を外に向かって開こうとする姿勢が高く評価された。

「Grass Cave House」は、敷地手前に広がる緑地との連続性を意図し、駐車場の屋根と住宅の屋根に芝生を設けることにより、周囲と連続した緑豊かな風景を生み出している点が評価された。特に、駐車場の上の芝生を住宅のリビングに向かって傾斜させることにより、室内に芝生の丘が広がっているような自然味溢れた風景をもたらした。

「新吉田の家」は、北側斜面に立地し、西壁が外側に斜めに傾いた個性的な形状を特徴としている。この斜めの壁は本棚で、地震でも落ちない本棚を設けることという要望から生まれたもので、その要望がそのまま住宅デザインに表現されている。南側に光庭を設けて採光を確保し、また、本棚に用いたツーバイ材をそのまま住宅構造材として展開するなど、シンプルな発想による明快なデザインが評価された。

「GILI GILI」は、都市計画道路の拡幅の際に、道路沿いに取り残された奥行のない土地に建てられた賃貸スペース付きの共同住宅である。地上6階建てで、3階までを車の振動と騒音防止のためにRC造、その上は平面計画の自由度を確保できるスチールパネル構造としている。3階上の住居部分には、風道とともに多様な開口部が見られるなど今後のこうした都市に取り残された敷地の利用提案として評価された。

「ハナミズキ」は、6棟の賃貸住宅とその付属施設であるコミュニティハウス及びゲストハウスからなる住宅団地である。天然素材を多用した賃貸住宅や付属施設を用いて、面的に豊かで自然味のある住環境を形成していこうとする計画姿勢が評価された。

「海を望む大開口の家」も、「360°」同様に、住宅地に取り残された崖地に建つ。その魅力は、一望に見渡せる風景であり、その風景を多様な見せ方を工夫しながら室内に取り入れている点が評価された。アピール賞（環境）の「G APARTMENT」は、4棟からなる賃貸住宅を、敷地を囲むように配置し、住民たちに開かれた共有の豊かな中庭を確保している。中庭の緑は、隣地の寺院の境内の緑と連続し、住民はもとより周辺住民のための環境形成の要素として展開されている点が評価された。